

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

例会 作品 帳

◎平成二十六年四月十九日(第十九回)

(佐藤 亮照)

湿雪の重みに屈し朽倒る五十余年の歴史去り行く

この冬も越したと思いいし池の主どこも探せど見えぬ鯉影

山ほどの雪にも耐えて群生すカタクリの咲く巡礼の道

(佐藤 志亮)

雨の音ゆうげの匂い今日の空記憶のしおりあの日をひらく

(黒沼 貞志)

道半ば甥の客死の報ありき心割かれる妻子の行く末

初めての強霜迎えし姫しやらの裸木さびし秋の夕ぐれ

ほろ苦き期待をこめて触れもせぬ中学最後のかるた大会

寒の雨誕生の日の花求め愛妻の日を知るあひさ一月三十一日

年重ね仲良く座るロープウェイ足下に迎える夏の花居り

木道に可憐に咲きしキスダらよハイカー迎える初夏の優しさ

布団干し客を迎える山の小屋秋が歩みし碧天のもと

核線のかなたに傷き遠雲にハイカーの秋想いそれぞれ

山麓のコスモス畑に踏み入りし夫婦の野遊び想い出づくり

天高し店の秋の蜘蛛風に揺られて客を迎えん

荷を置きし園児何処と訝れば歓声響く小春日の丘

鳥海を遙かに臨む丘の上土門の写真の余韻と共に

散りもみじ粧い変えてよみがえり水面の上紅の共演

古刹にて出会いし古木謂われあり銀杏葉散る頃蔵王に初雪

雪纏い墨絵のごとき裸木に重ねて憶えりもみじ葉の季とき

凍返る如月の朝雪を掻き妻と味わう夕々の汗

雪がつみ滝も隠るる最上川朱さ際立つ岸辺の鳥居

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

雨水の日路肩の堅雪うず高く思い及びし孤立の村々
語り合ふ視線の先にさくら花若いふたりの夢の隣に
満開の桜と競うひこばえのその健気さよいと愛おしき
昼休み城址の広場にチアガール黄色い声に若さ溢れて

(千景 克明)

大雪にカマクラ出来た写メール孫のよろこび東京の空
雪かきを喜びとする加齢かなからだ動かす厳寒の日々
大雪がいつもと違う地域にも自然の猛威人智を超える
遠方の子等から届いたチヨコレート年輪かさね嬉しさひとしお
しんしんと降りつづいたる細雪春まちわびる心しらずに
孫と行く桜並木の花吹雪命の絆深くおぼゆる

(寺崎 秀也)

謹みてみ寺の中でご和讃を唱え上げたや叡山流
鳴り響くみ寺の鐘が何処までも旅路の果ての弥陀の国へと

(長谷川 美喜男)

春風と川を登りし桜ます傷つきながら子孫を残す
花ごよみ普通った飲み屋の名ふるさと戻り季節味わう